

# 佐野 翠坡（さの・すいは）

## 1、プロフィール

明治末期の県文壇で活躍し、43年に上京。その後「潮音」ほか多くの中央誌に関係し、本県歌壇にも少なからぬ影響を与えた。没年まで自らの作歌と短歌の普及につとめた。

<生没>

1888(明治 21)年4月 27 日 ~ 1986(昭和 61)年7月 28 日

<代表作>

共同歌集『交響』

歌集『白鷺』

<青森との関わり>

弘前市大字富田字大野 21 番の1に生まれる。明治 43 年上京。鉄道省の官吏として転居。千葉県で晩年をおくる。

## 2、作家解説

歌人。明治 21 年に現在の弘前市大字御幸町 18 の5に、父佐野末太郎と母ぎんの長男として生まれる。本名は光雄。高等小学校時代から短歌を作り、明治 40 年ころからは中央雑誌「明星」「新潮」「文章世界」などに投稿してしばしば上位入選をした。また、佐々木信綱の『玉川集』などに採られ、その活躍が注目されていた。

本県文壇には明治 40 年5月の「東奥日報」に登場するが、それ以前に「陸奥日報」の文芸欄を担当しながら自作を発表していたといわれる。翠坡は技巧もすぐれ、青春の匂いの高い歌を発表し県文壇でも囁目されたが、いつも一匹狼的で、県内のグループに本気で参加したことがなかった。明治 43 年の青森大火の直後に翠坡は上京したが、「東奥日報」にはその後もおびただしい数の作品を送っている。

上京後は柳川春葉の書生となり、一時は新聞社の校正係などをして生活をたてたが、やがて鉄道局に仕事を得、鉄道省の官吏となって一生をおくった。

短歌方面では、明治44年に創刊に力を尽くし、大正4年には太田水穂の「潮音」が創刊されるや入社して会員獲得にも努めた。本県歌壇が若山牧水の「創作」中心から次第に「潮音」に移り変わっていくのも翠坡の影響が大きかった。その後は「霸王樹」に加わったが、昭和に入り発行された「橄欖」同人として長く活躍した。昭和6年、同会の同人小笠原文夫、村磯象外人との共同歌集『交響』が出版された。

戦後は昭和22年に「珊瑚礁」復刊と同時に同人として入会したが、この間も歌人としては土屋文明を尊敬し、「アララギ」も長いこと購読をしていたといわれる。

翠坡は鉄道省役人として定年まで勤務し、その間は職員への作歌指導と普及に努めた。退職後は千葉県船橋市に居を構えて昭和35年ころまで公民館などで短歌教室を開き、白鷺短歌会を結成した。昭和51年には同会から歌集『白鷺』が出版された。なお、同短歌会は翠坡没後の現在も継承し、合同歌集を出版しつづけている。

### 3、資料紹介

○『白鷺』

図書

1976(昭和51)年10月20日

185mm×130mm

佐野翠坡の米寿を記念して、「白鷺」の門弟たちが出版した歌集。主宰誌「白鷺」に掲載された歌593首を収録している。さらには、「白鷺」会員74名の歌もそれぞれ1首ずつ収載している。